

て」はいないか (p. 186)。

このような個性化ないしは個性教育の問題点を、どう考えたらよいか。住田のいう「個性化と社会化とは縊り合わさって人間形成過程」全体を構成している (p. 57)、という根本に立ち戻ってみる必要があるように思う。じっさい本書においても、萩原は、個性とは「意思決定の過程において、他者との関わりで自由な選択力を持つその人独自の行動的ないし能力的特性」(p. 14) であるとし、このような個性の形成メカニズムを、他者を受容し他者が自立できるよう援助する「アコモデーション」(p. 31)、あるいは石戸は、ルーマンのいう「オートポイエシス」すなわち「環境に適応しながら自己を構成する要素を再生産する」もの (p. 38)、にそれぞれ求めている。ここに言う「他者とのかかわり」「環境に適応」といったところこそ、個性化と社会化の分ち難い実態があり、そこに今後いつそのメスや実践の工夫が求められることを、本書は教示している。

たしかに、私たちの教育的課題「個性尊重の教育」は一つの「教育的スローガン」にすぎぬかもしれない。しかし、個性尊重と個性教育とを求めざるをえない、歴史的社会的文脈は厳としてあり、けっしてそれは幻想ではない。「個性とはなにか」「個性形成をどう進めるか」本書はこの点に関する「リーディングス」ないしは「テキスト」として、理論的にも実践的にも私たちが「個性の社会的原点」に連れもどす書ということができただろう。

今津孝次郎・樋田大二郎編

## 『教育言説をどう読むか』

新曜社、1997年

永井聖二 (群馬県立女子大学)

本書は、今日の教育議論に関わるさまざまな子どもと子どもの指導に関わる言説が検討され、解き明かされていく好著である。ここでいう教育言説とは、人々を幻惑する力を持つ、認識や価値判断の枠組みとなる論述を意味するが、具体的には「個性尊重」「カウンセリングマインド」「大人と子ども」などに代表される、殺し文句になったり、一定の行動を促したり、攻撃したりする論述を指す。それがどんな使われ方をして、いかなる役割を果たしているかを論じた本書の各章は、われわれが往々にして自明視しがちな言説の意味を改めて問い直して新鮮な刺激を与えてくれる。アリエス以来の、大人たちが子どもを見る視点の対象化という側面からの子ども論との関わりからも、本書で取り上げられた教育言説の検討は、きわめて示唆的なものと言えよう。

たとえば、「いじめは根絶されなければならない」という言説を取り上げた第8章の「教育言説において全否定は『教育の現場にあるまじきこと』という形で、現象の『非教育性』ゆえに事情の如何を問わず否定される。そこでは人間どうしの相互作用がもっている複雑性や、相互作用の生じる文脈の個別性などは捨象され、『教育』『教育的』という絶対不可侵の価値に相反するものとして一切が否定される。しかし私たちはこうした複雑性や個別性のな

かに生きており、そのことを日常的によく知っている。したがって私たちが生きる現実と、硬直した教育言説とは著しくかいらしていくことになる。」「このような形でおびたたく生産されるいじめ論は、それを語る人々にカタルシス（浄化）をもたらしているだけである。無限定に拡張され、すべてが否定されたいじめについての議論は、ひたすら情緒的に子どもを救うことを叫ぶ。しかしそれによっていじめがなくなり、子どもが救われるわけではなく、むしろ『子どもを救え』という、否定しようのない正義を叫んでいる人々こそが、その主張の無謬性によって救われているのである。」という指摘は今日のいじめの議論の問題性を見事に示している。

この他にも、「学校は子どもの個性を尊重するところである」「学級は“生活共同体”である」「子どもの喫煙はよくない」「不登校を克服することで一段と成長する」など、おなじみの教育言説が検討されているが、それぞれが既存の教育知の問い直しとして、興味深く論じられている。ただ、この種の分担執筆のやむをえぬ帰結でもあろうが、「教育言説」に迫る視角が章によってかなり異なる点は気になる。テーマからして構築主義の影響が強い部分があるのは当然であるが、規範的な検討として読める部分もある。統一する必要もないが、序章の解説に何らかのコメントがあってもよかったように思う。

また、著者が序章で指摘しているように、教育言説とは「聖性が付与されて人々を幻惑させる力を持つ」ものであり、それは言説のもつ権力性に由来する。したがって言説を解き明かすことは、教育にはたらく政治的力関係を問題にすることと深くかかわるのだが、だとすれば、教育言説を検討することは、一般のマスメディアにせよ、教育ジャーナリズムにせよ、そこでの問題の論じられ方を狙上にのせることにとどまるものではない筈である。序章において指摘されているこの点が、具体的な検討がすすめられている各章では率直いってもの足りない。

また、これは私の感想に過ぎないが、知が真実に関するものではなく、われわれは支配者のつくったイメージの中で社会的に構築され、表象されるのだとするならば、この相対主義の先にわれわれは何を求めうるのであろうか。「この本を、既存の教育言説の拘束から解き放ち、教育論を立て直していくための仕掛けとして読むか、または新たな教育言説に向けての勧誘として読むか、あるいは既存の教育知への挑戦と読むか、あるいはまた知的な愉しみと読むか、いずれの読み方も私たちの意図にかなうものだ」とは編者のことば（あとがき）であるが、私自身は、既存の教育言説の拘束から解き放つものとして興味深く呼んだものの、「教育論を立て直していくための仕掛け」として位置づけることは難しかった。それは多くの執筆者のめざすところではなかろうが、この点についてわたしたちが考える手がかりを与えてもらえたらというのは、過大な期待というものであろうか。

とまれ、本書が既存の教育知を対象化して示してくれた世界は、とくにこの学会の会員の多くにとって、有益な示唆を与えるものである。本書が多くの読者を得ることを期待したい。